

「わ

かる」ってどういうことかを考えてみると、科学ですべてがわかっちゃあう、なんてありそうもないと思います。人が何かをわかったと言った場合、普通は、ふたつのことが意味されています。それは、(A) 自分の目や耳で事実を確かめた場合のように「それがあるがままに受け入れた」ということか、あるいは、(B)すでに自分が受け入れた事実から「それが説明できた」、ということでしょう。

ところで、物理学や化学のような自然科学であれ、社会学や経済学のような人文科学であれ、科学が提供する「説明」は、基本的には「どういう仕方ですうなるの(how)?」という問いに対する答えであって、「なぜその答えではありませぬ、このふたつの問いは、とても紛らわしいのですが、前者は「原因による法則的説明」、後者は「理由による正当化」を求めているのです。「どうして春になると桜の花は咲くの?」という問いと、「なぜ泥棒をしてはいけないの?」という問いの違いです。

子どもの難問

哲学者の先生、答えてください!

そこで、量子力学から心理学に至るすべての科学の説明がうまく具合にすぎず、それらの扱う現象がすべてもれなく説明されるようになったとしましょう。しかし、そんなありそうもない場合でも、人は依然として(A)のような事実、つまりすべての説明の最初の根拠について、「それはどういう仕方ですうなるのか?」と問うことでしょうか。いえむしろ、「宇宙の始まりはどうしてそういう風に始まったのか?」といった具合に、人は根拠の根拠を問わずにはいられないのです。そこでこういう場合、「説明」に何が起きるかという、次の三つの可能性しかないと言っているでしょう。(1) 説明の根拠をどんどんさかのぼっていくって、説明に終わりがなくなると。(2) Lを説明するのがMであり、Mを説明するのがSなのだけれども、Sを説明するのは元のLである、という具合に説明がぐるぐる循環する。(3) 根拠へ無限にさかのぼるのは嫌だから、どこかで「えいやっ」と勝手に説明を打ち切る。

ものが残ってしまったでしょう。

さて、先に述べたように、「なぜwhy」という「理由による正当化」の問いは科学の問いではないのですから、その答えも、(もしあるのなら)科学によってわかるものではないでしょう。「なぜこの世に悪はあるのか?」といったような、人である限り、どうしようもなく問いたくなるこういう問いこそ、本当に問うべき問いなのだ、と考える哲学者は少なくありません。たとえば、あなたの両親はなぜこの世で出会ったのでしょうか? あなたはなぜ生まれてきたのでしょうか? 「なぜ何もないのではなく、何かがあるのか」と問うてきた多くの哲学者たちのように、人は有限な存在だからこそ、科学ではわからない多くのことを問わずにはいられないのです。世界は謎に満ちています。だからこそ面白い。

柴田 正良先生

1953年大分県生まれ。東京都清瀬市立芝山小学校、同市立第二中学校、東京都立東久留米高校、千葉大学を卒業後、名古屋大学大学院博士課程を満期退学。現在、金沢大学人文学類教授。著書に『ロボットの心』(講談社現代新書)がある。

子どもが抱く素朴な疑問には、実は、哲学の本質がぎゅっと詰まっています。親も答えるのが難しい。そんな「難問」に、毎回2名の哲学者が真剣にお答えします。

ぜんぶわかるほど世界は簡単じゃあない

